

訳注

大橋二水撰「三谷翁碑」碑文訳注並びに解題
——忘れられた種痘の功労者——

大野圭介

富山大学人文科学研究第81号
2024年8月 抜刷

大橋二水撰「三谷翁碑」碑文訳注並びに解題 ——忘れられた種痘の功労者——

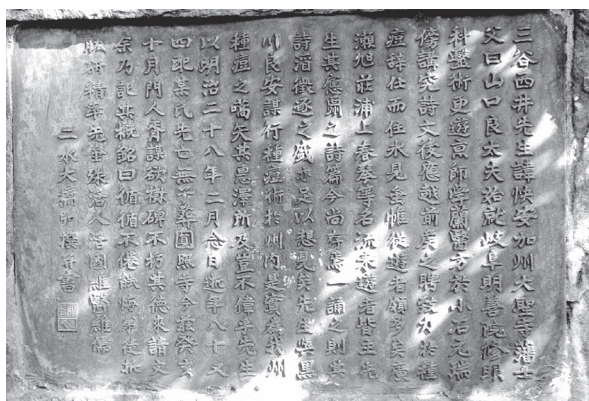
大野圭介

はじめに

富山県氷見市の中心市街地西側に小高い丘陵地があり、その一角が朝日山公園として整備されている。この公園は一九〇九（明治四十二年）に当時の皇太子（後の大正天皇）の北陸巡啓を記念して開園したもので、これに先立つ一九〇七（明治四十）年に日露戦争勝利を記念してこの地に松や桜が植えられたのがそもその始まりであることから、朝日山山頂の展望休憩所付近には当時建てられた神武天皇の銅像が今も残っており、台座には乃木希典の揮毫による「永芳」と篆書で書かれた銘板がある。日露戦争から一世紀以上を経た今では、この公園がナシヨナリズム高揚の場と認識されることはほとんどなく、市街地と富山湾を一望できる桜やツツジの名所として、氷見市民や観光客の憩いの場になっている。

その朝日山公園の展望休憩所から少し下ったところに、当地出身の剣豪斎藤弥九郎（一七九八（寛政十）年～一八七一（明治四）年）の銅像が建っていて、園内にある案内図にもその名が明記されている。その隣にあるのが「三谷翁碑」と大書された石碑で、台座には近代富山を代表する漢詩人のひとり大橋二水（一八五九（安政六）年～一九四〇（昭和十五）年）の撰文と書による、蘭方医西井三谷（一八二二（文化九）年～一八九五（明治二十八）年）を顕彰する文を刻んだ銘板がはめ込まれている。筆者は二〇二二年九月に朝日山公園を訪れて「三谷翁碑」を実見する機会があったが、この碑や銘文に関する案内板などは設けられていないばかりか、園内の案内図にもこの碑の名は記されておらず、関心を示す遊覧客もほとんどない状態であった。

図1 三谷翁碑碑文（筆者撮影）及び釈文



三谷西井先生諱快安加州大聖寺藩士
父曰山口良太夫始就岐阜明善院修眼
科醫術更遊京師學蘭醫方於小石元瑞
傍講究詩文後應越前侯之聘致力於種
痘辭仕而住水見垂帷從遊者頗多矣廣
瀬旭莊浦上春琴等名流來遊者皆主先
生其應酬之詩篇今尚存焉一誦之則其
詩酒徵逐之盛亦足以想見矣先生與黑
川良安謀行種痘術於州内是實爲我州
種痘之嚆矢其惠澤所及豈不偉乎先生
以明治二十八年二月念日逝年八十又
四配某氏先亡無子葬圓照寺今茲癸亥
十月門人胥謀欲樹碑不朽其德來請文
余乃記其概銘曰循循不倦能悔弟徒折
肱研精率先垂殊活人活國維醫維儒

二水大橋弘撰并書

図2 三谷翁碑全体像（筆者撮影）



この後詳述するように、西井三谷は氷見の生まれではないとはいえ、当時加賀藩領であった氷見で初めて種痘を行った人物であり、しかもその後半生を氷見で開業医として、また漢詩人として過ごしている。その功績を顕彰する碑文が誰にも顧みられないまま埋もれているのは実に惜しいことである。そのため漢文で書かれたこの碑文の原文を録すとともに訳注を施し、併せて西井三谷及び碑文を撰した大橋二水とその周辺についての解題を付して、日本漢文や医学史など諸方面での研究の便に供することにしたい。大方のご批正を俟つ次第である。

一、「三谷翁碑」碑文訳注

まず「三谷翁碑」の全文に句読を付した原文と、その訓読・現代語訳・注釈を以下に示す。

〔原文〕

三谷西井先生、諱快安、加州大聖寺藩士、父曰山口良太夫。始就岐阜明善院修眼科醫術、更遊京師、學蘭醫方於小石元瑞、傍講究詩文。後應越前侯之聘、致力於種痘。辭仕而住氷見垂帷、從遊者頗多矣。廣瀬旭莊・浦上春琴等名流來遊者、皆主先生、其應酬之詩篇、今尚存焉。一誦之則其詩酒、徵逐之盛、亦足以想見矣。先生與黒川良安謀行種痘術於州内、是實爲我州種痘之嚆矢。其惠澤所及、豈不偉乎。先生以明治二十八年二月念日逝、年八十又四。配某氏先亡、無子、葬圓照寺。今茲癸亥十月、門人胥謀欲樹碑、不朽其德、來請文余、乃記其概。銘曰、循循不倦、能悔弟徒、折肱研精、率先垂殊、活人活國、維醫維儒。

二水大橋弘撰并書。

〔訓読〕

三谷西井先生、諱は快安、加州大聖寺藩士¹、父は山口良太夫と曰う。始め岐阜の明善院²に就きて眼科醫術³を修め、更に京師に遊び、蘭医方を小石元瑞⁴に学び、傍ら詩文を講究す。後に越前侯⁵の聘に応じ、力を種痘に致す。辞仕して氷見に住み帷^{とばり}を垂れ⁶、

從遊する者頗る多し。広瀬旭莊・浦上春琴等の名流の来りて遊ぶ者は、皆な先生を主とし、其の応酬するの詩篇、今尚お存せり。一たび之を誦すれば則ち其の詩は滔として、徴逐の盛んなること、亦た以て想見するに足る。先生と黒川良安¹⁰と謀りて種痘術を州内に行い、是れ実に我が州の種痘の嚆矢と為る。其の恵沢の及ぶ所、豈に俾れざらんや。先生明治二十八年二月念日¹¹を以て逝く、年八十又四。配の某氏は先に亡し、子無く、円照寺¹²に葬らる。今茲癸亥十月、門人胥な謀りて碑を樹て、其の徳を不朽ならしめんと欲し、来たりて文を余に請い、乃ち其の概を記す。銘¹³に曰く、循循¹⁴として倦まず、能く弟徒¹⁵を誨え¹⁶、肱を折りて¹⁷研精し、率先して殊を垂れ¹⁸、人を活かし国を活かす、維れ医なり維れ儒なりと。

二水大橋弘撰し並びに書す。

〔現代語訳〕

三谷西井先生は、本名は快安、加賀大聖寺藩士で、父は山口良太夫という。最初岐阜の明善院で眼科の医術を学び、さらに京都に遊学して蘭方医術を小石元瑞に学び、その傍ら詩文を学び究めた。後に越前藩主の招きに応じて藩医となり、種痘に力を尽くした。藩医を辞してから氷見に住んで読書詩作に専念し、交遊する者は大変多かった。広瀬旭莊や浦上春琴ら一流の文人が遊びに来た時も、みな三谷先生を主人として尊び、応酬した詩は今なお残っている。その詩を朗誦すれば天下に広まり、詩人たちの交遊が盛んだったことも思わせるに十分である。先生は黒川良安と相謀って加賀藩内で種痘術を実施し、これこそが加賀の種痘の嚆矢となった。その恩恵のもたらしたものは、何と偉大なことであろう。先生は明治二十八（一八九五）年二月二十日に亡くなった。享年八十四。妻の某氏は先に亡くなっており、跡取りの息子はおらず、円照寺に埋葬された。今年癸亥の年（一九三三）の十月、門人たちが皆で相談して、碑を建ててその徳を後世まで永遠に伝えようとし、私に碑文を求めてきた。そこでその概略を記し、銘に言う。「順序立てて努めて倦むことなく、弟子たちを立派に教えて、苦労を重ねて研鑽し、率先してすぐれた模範を示し、人を生かし国を生かす、これこそ医者であり儒者である。」と。

二水大橋弘文を撰して書す。

〔注釈〕

- 1 加州大聖寺藩士 大聖寺藩は加賀国江沼郡全域と能美郡の一部を領地とした藩。加賀藩の支藩であった。
- 2 岐阜明善院 未詳。医学塾あるいは医院の名か。
- 3 鑒術「鑒」は「醫（医）」に同じ。
- 4 小石元瑞 江戸時代後期の蘭学者（一七八四（天明四）年～一八四九（嘉永二年））。諱は龍^{いみな}または橘龍^{とうけん}、字は征軒^{せいけん}、京都の人。十六歳の時江戸に遊学し、杉田玄白・大槻玄沢らに蘭学を学んでから、京都に戻って父・元俊から医学塾「究理堂」を引き継ぎ、多くの弟子を育てた。著作に『櫻園隨筆』、『東西医說析義』、『西説痘瘡記聞』などがある。漢詩・書・茶道などを善くし、浦上春琴や頼山陽らとも親交があった。
- 5 越前侯 福井藩主松平春嶽（諱は慶永、一八二八（文政十一年）～一八九三（明治二十三年）年）。一八三八（天保九年）、十一歳で藩主となり、洋学所の設置など藩政の改革に努めたが、一八五八（安政五年）年、勅許を得ずに日米修好通商条約の調印を強行した大老井伊直弼の責任を追及しようとして江戸城に押しかけたことを罪に問われ、隠居謹慎させられた。
- 6 垂帷 部屋のとばりを下ろすことから「読書や著作に専念する」意。『漢書』董仲舒伝に「董仲舒、……下帷講誦、弟子傳以久次相授業、或莫見其面。（董仲舒は、……帷を下ろして講誦し、弟子伝えて以て久次相い業を授け、或いは其の面を見る莫し。）」と云い、「垂帷」の形では『芸文類聚』卷五五引く晋の束皙「読書賦」に「垂帷帳以隠几、披紈素而讀書。（帷帳を垂れて以て几を隠し、紈素を披りて読書す。）」と云うのが初出。
- 7 広瀬旭莊 江戸時代後期の漢詩人（一八〇七（文化四年）～一八六三（文久三年））。豊後日田（大分県）の人。諱は謙、通称は謙吉、字は吉甫。勤皇の志士としても桂小五郎・佐久間象山・吉田松陰らと親交があった。性は豪放磊落、才氣横溢した詩風で知られ、兄に同じく漢詩人の広瀬淡窓がいる。
- 8 浦上春琴 江戸時代後期の南画家（一七七九（安永八年）～一八四六（弘化三年））。備前岡山の人。諱は選、字は十千または伯挙、通称は紀一郎。十五歳で漢学者皆川淇園に師事した後、長崎に遊学してから京都で画業に専念し、頼山陽・田能村竹田・柏木如亭ら著名な文人と交遊した。山水画や花鳥画を得意とし、温順で気品ある画風で知られた。
- 9 徴逐 友人間で互いに招き合う。唐の韓愈「柳子厚墓誌銘」に「今夫平居里巷相慕悦、酒食遊戲相徴逐、（今夫れ里巷に平居して相い慕悦し、酒食遊戲相い徴逐す。）」と云う。
- 10 黒川良安 江戸時代後期の蘭学者・蘭方医（一八一七（文化十四年）～一八九〇（明治二十三年）年）。名は「りようあん」とも読まれる。越中新川郡（現富山県上市町）の人。十一歳で長崎に留学してシーボルトに学び、十九歳で大坂の適塾に移って緒方洪庵に学び、さらに江戸の蘭学者・坪井信道にも学んだ。一八六二（文久元年）年に金沢種痘所を創設し、後にこれを拡充した金沢藩医学館は金沢大学医学部の母体の一つとなった。
- 11 念日 二十日。「念」は「廿」^ニと発音が通じて「二十」の意。
- 12 円照寺 富山県氷見市中央町にある真宗大谷派の寺院。開創年は不明。

- 13 銘 人の功績を顕彰する文に用いられる文体。通常は四言の句を連ねて押韻する。
- 14 循循 順序正しく整然としているさま。『論語』子罕に「夫子循循然善誘人（夫子循循然として善く人を誘う）」と云う。
- 15 弟徒 「徒弟」に同じ。四句目の「殊」、六句目の「儒」と押韻するために語順を入れ替えている。
- 16 能悔弟徒 原文の「悔」は「誨」の誤りか。
- 17 折肱 何度も自分のひじを折って自分で治すような苦勞をして名医になろうとする。『春秋左氏伝』定公十三年「三折肱、知為良醫（三たび肱を折りて、良医と為るを知る）」による。
- 18 垂殊 「模範を示す」意では通常「垂範」と言い、「垂殊」は一般的な語ではない。韻を合わせるための造語か。

二、「三谷翁碑」解題

(一) 西井三谷とその周辺

「三谷翁碑」の記述から、三谷西井快安は医師として加賀藩領の水見で初めて種痘を行ったほか、漢詩人としても広瀬旭莊ら名だたる文人と交遊があったことが窺い知れる。医師としての三谷は人望があり、雑誌『医事新聞』三十五号（二八八一（明治十四）年一月、医事新聞社）の「雑報」には「氷見保生社」という医療団体の社長を務めていた旨記される¹⁾。また『自治・産業・教化躍進日本（福井県・富山県・新潟県）』（一九三八（昭和十三）年、帝國聯合通信社）二二四ページには富山県内の医院の紹介があり、その中の「好生堂医院」の項に、経営者篠田義成の父嘉吉が「名国手西井快安の門に入り、後その事業全部を承継して明治三十年より正式に開院した」と記されている。さらに嘉吉も長崎で種痘を研究し、快安と同じく小石元瑞²⁾のもとで学び、多くの弟子を育て、氷見市内の各学校の校医を務めて信望が厚かったとも云う。「名国手（名医）」と崇められた三谷が氷見の医療に残した足跡は大きかったといえる。

教育者としての三谷の姿は、氷見の出身でセメント工業を成功させ浅野財閥を築き上げた浅野総一郎の述懐が残っている。子息の良三による伝記『浅野総一郎』（浅野泰治郎（総一郎の出生時の名）・浅野良三著、一九二三（大正十二）年、愛信社）四六～四七ページには、

其頃、養父（宮崎南嶺——筆者注）の同業者で、氷見仲町に西井快安という人があった。此人は、以前某大名の祐筆を勤めたというので、書を能くした。養父は、泰治郎が十二歳の春、この快安先生の許へ通うて、書道を学ぶべく入門を宣告した。……

往って見ると左程面白い処でも無い。快安先生は、養父よりは、幾らか穏かだが、矢ッ張り、勉強を強いる点は同じだ。（原文は

とある。総一郎はその後快安の塾で知り合った二人の友人とともに、もと金沢藩士で氷見に移ってきた渡辺悌次郎に漢学と武術を教わったが、相撲には勝っても四書五経の勉強はものにならなかったという。もともと勉強好きではなかった幼時の総一郎にとって、快安の温厚ではあっても謹厳な教育はなじめなかったようだ。

このように三谷の生平や事跡に関する記録は、『三谷翁碑』以外は断片的なものにとどまっており、後に書かれた人物伝も概ね『三谷翁碑』の内容がもとになっている。たとえば吉川正文『比美の杜かげ』（一九四一年、非売品、嶋尾正一出版）の西井三谷の項（同書五九一～五九四ページ）は『三谷翁碑』の全文を録しているが、原文だけで句読や訓読はなく、その大意を記した後、三谷の師の小石元瑞、三谷とともに種痘を行った黒川良安、三谷と交遊のあった浦上春琴の略伝を付している。黒川良安については文献や記録も豊富に残されており、評伝³やテレビ番組⁴などで紹介されることも多い。出身地の富山県上市町黒川には「黒川良安翁顕彰碑」があり、同町教育委員会による案内板も設置されているのに比べると、三谷はもはや忘れられていると言っても過言ではないだろう。

漢詩人としての西井三谷については、『氷見の自然と歴史』（一九七四年、「氷見の自然と歴史」編集委員会編、氷見市教育委員会）が「詩壇では天保十一（一八四〇）年、氷見にはじめて種痘を伝えた西井三谷があらわれ漢詩をよくし、多くの人が、その教えをうけました」と記す（同書二五五ページ）。しかし三谷の詩文集は管見の限り残っておらず、その活動の実態は不明な点が多い。亀谷龍二・橘有隣編『越中古詩鈔』（一九二六（大正十五）年、光奎社）は江戸期から明治にかけて富山県内で活躍した漢詩人の詩を集めて略伝を付すが、これにも三谷の詩は採られていない。

そうした中で、三谷を訪ねて交遊した文人たちの書き残したものがいくつか残っており、漢詩人としての三谷の姿を伝える貴重な資料となっている。まず津島北溪⁵「英遠紀行」（『高岡詩話』所収、一九二七（昭和二年）、篠島先生彰徳会が金沢津島邦彦氏所蔵写本に拠って出版）は、北溪が一八五七（安政四）年に二人の詩友を伴って氷見を訪れ、現地に集まった三谷ら氷見在住の詩友とともに氷見の北にある阿尾城跡に登って詩を応酬したことを記す。題の「英遠」は「阿尾」の万葉仮名である。海面を見下ろす断崖まで来て、宴席を設けて杯を回すうちに、皆が詩興を催して呻吟していると、まず北溪が絶句を一首調えてしたためた。

偶然來飲阿尾城、
偶然來たり飲む阿尾の城、

乘興不妨日欲傾、
興に乗じ妨げず日び傾けんと欲するを。

吟思要模模巨得、
吟思模せんと要むるも模すること得巨し、

山光水色競相呈、
山光水色競つて相い呈す。

(大意) たまたまやつて来た阿尾城で酒を飲む。興に乗つたら毎日酒を傾けたくなるのもよからう。詩情が湧いて描き取ろうとしてもなかなか描ききれない。山のけしきも水の色も競うように目の前に現れてくるのだから。

すると三谷がそれに次韻して唱和した。

吟友偶登阿尾城、
吟友偶^{たまた}ま登る阿尾の城、

提來瓢酒數杯傾、
瓢酒を提げ来りて数杯傾く。

衆人無怪此風景、
衆人怪しむ無かれ此の風景を、

碧水青山爲客呈、
碧水青山客が為に呈す。

(大意) 詩友がたまたま阿尾城跡に登って、持ってきた瓢箪の酒を何杯も傾けている。人々よ、この風景を奇異に思わないでくれ、ここから見える青海原も緑茂る山も、この客のために現れてきたものなのだから。

やがて日が傾き、山道を下ってから、三谷と南旦里^{みなみたちり}が一行を料理屋に招いて宴席を設けると、石垣淵斎^{いしがきんさい}が阿尾城で作った詩を披露した。その詩に云う。

高陵吟友訪來時、
高陵の吟友訪ね來たるの時、

共挈一瓢阿尾湄、
共に一瓢^{たすき}を挈^{みぎわ}う阿尾の湄。

迤邐羊腸攀上處、
迤邐^{いり}羊腸として攀^よじ上る處、

始驚身是在懸涯、
始めて驚く身は是れ懸涯^こに在りと。

(大意) 高岡の詩友たちが訪ねてきて、一緒に酒を携えて行った阿尾の断崖のみぎわ。うねうねと続く道をよじ登ったところで、初

めてこの身が断崖の縁に在るのに気づいて驚いた。

「英遠紀行」はこの後にも、北溪が旦里の家に招かれて一晚厄介になり、同行の詩友たちと遅くまで飲み語らい、既に世を去った友人と夢の中で語り合ううちに朝を迎えたことや、その日も三谷の家に招かれて茶菓子をご馳走になった後、再び旦里の家で海鮮や酒を呼ばれ、さらに湖水で遊覧しようという誘いを、医師の仕事があるから何日も留守にはできないと辞退し、皆と別れて舟に乗って帰り着くまでのことを描いている。三谷をはじめ氷見在住の漢詩人たちが遠来の北溪たちを歓待するさまが、飾り気のない文体で描かれ、漢詩人たちの盛んな交遊のありさまがよく窺える文である。

また「三谷翁碑」碑文では、広瀬旭荘らの大家が三谷を訪問したことに触れられているが、前引『比美の杜かげ』の「広瀬旭荘」の項（五〇三ページ）に「郷土の旧家に所蔵せられるもの」として「誉一樓上旭荘⁹三谷迎富山美人戲賦（誉一樓上に旭荘・三谷富山の美人を迎え戯れに賦す）」と題する旭荘の七絶を載せる。

残酒蕭條尚未収 残酒蕭條として尚お未だ収めず、

佳人一咲上吾樓 佳人一咲¹⁰して吾が樓に上る。

繁絃奏出新翻曲 繁絃は奏で出だす新翻¹¹の曲、

毆去¹²客愁無所求 客愁を毆^かり去りて求むる所無し。

「飲み残しの酒もさびしくなってきたがお開きにはならず、綺麗どころがにつこり笑って我らが樓に上がってきた。三味の音もさわに歌や踊りが始まると、旅愁もどこかへ吹っ飛んでこれ以上はもう何もいらぬ」という内容である。戯作とはいえ旭荘の磊落な一面を窺わせるに十分である。もつとも同書によれば旭荘の北陸訪問は一八六〇（万延元）年のことで、旭荘は勤皇の志士としても活動していたことから、「その事情、単なる風雅のためのみか、あるいは、同志を索^{たず}ね且つはひそかに幕府の追捕を避けんとせしか、さまざまに言われてもいるが、其の交る友を観^み遺^い文^{ぶん}に徴して、後者の觀察の寧ろ実情に当れるを思うのである」（五〇一ページ、振り仮名は原文。原文の旧漢字・旧仮名遣いを改めた。）と推測し、その根拠として彼が放生津（現在の射水市新湊）から高岡の志士逸見^{へんみ}方舟^{ほうしゅう}に宛てた書簡に

此地^{このち}にも逐客^{しよく}之令格別嚴重に申来る中に旭荘なる者似^じ儒^{にう}非^ひ儒^{にう}不埒^{ふらち}者^{もの}に付其^{つき}者^{もの}の手跡等致^{いたし}珍重^{ちんじゆう}或^{ある}は招請^{しやうせい}杯^{はい}は以ての外心得

違に付能相さとし候（五〇二ページ、振り仮名・返り点は筆者）

と云うのを挙げる。前引の七絶にうたわれる三谷との芸者遊びも、お尋ね者の身で幕府の目をかいくぐりながら束の間の安逸を得ていたのだとすれば、結句の「求むる所無し」は決して単なる誇張ではなからう。三谷が尊皇倒幕運動にどの程度関与していたかは定かではないが、勤皇の志士をかくまうほどの度量を持ち合せていたことは間違いない。

（二）碑文の撰者・大橋二水について

大橋二水は、名は弘、通称は十右衛門。現高岡市の町年寄の家に生まれる。若くして京都の儒者草場船山¹³に漢学を学び、その後東京で英語を学び、犬養毅・尾崎行雄と交遊。政治塾「越中義塾」を開き、越中改進黨の創立に参加して自由民権運動に積極的に参画するなど政治への志も高く、県会議員を務めた後、一九〇二（明治三十五）年に衆議院議員に当選したが、一期務めた後は政治活動から身を引き、漢詩書画に専念した。内山外川¹⁴・岡崎藍田¹⁵・片口江東¹⁶らとともに近代富山を代表する漢詩人と目され、富山や高岡の漢詩壇で主導的役割を果たした後、金沢に移り、それでも漢詩壇の重鎮として活躍した。詩文集に『二水遺稿』があり、高岡市立図書館などに所蔵する。またかつて高岡城があった地である高岡古城公園には、高岡城を築いた前田利長をしのぶ二水の七絶を刻んだ石碑が建っている。その詩に云う。

山河此處舊金湯　山河此の処旧金湯、

太守英風鎮四疆　太守の英風四疆を鎮む。

長使遺黎懷惠澤　長えに遺黎をして恵沢を懷わしむ、

一園華木是甘棠　一園の華木是れ甘棠。

「大山大河に守られたこの場所こそかつての金城湯池、殿たる利長公の英雄の威風は四方の国境まで抑え鎮めた。いつまでも後世の民にその恩沢を思い出させている、この公園に花咲く木々はまさしくあの周の召公が憩いし甘棠の木なのだ」という内容である。この詩は『詩経』召南・甘棠「蔽芾甘棠、勿剪勿敗、召伯所憩。（蔽芾たる甘棠、剪る勿れ敗る勿れ、召伯の憩いし所。）」を踏まえており、この甘棠

の木は召公さまがその陰で憩うた木だから切らないようにしようと民が歌ったことから、甘棠は領民が明君の恩徳を慕うことの象徴として用いられる。

前引の『越中古今詩鈔』に採られている二水の詩から拾ってみると、

次外川詩韻（外川の詩の韻に次す） 其一

籬菊花開露裊黃 籬の菊は花開き露は黄を裊す、

偶因問句坐堂皇 偶ま句を問うに因りて堂皇に坐す。

秋末佳節都並得 秋末の佳節都て並びに得たり、

風月平分又一場 風月平分して又た一場。

「垣根の菊の花が咲いて、露が花の黄色を湿らせている。たまたまできた詩句を皆に問うてみよう」とこの四阿に座った。秋の終わりのよい季節は皆が等しく得られるもの、この美しい自然の景色も平等に分ち合ってまた詩を競い合う」という内容である。野外での詩会の席で内山外川の詩に次韻したものであらう。

六十初度自述（六十初めて度り自ら述ぶ）

人間敢羨地行仙 人間敢えて羨む地行の仙、

眼底風塵未了縁 眼底の風塵未だ縁を了えず。

百廿五齡成定壽 百廿五齡をば定壽と成し、

笑吾六十是中年 吾が六十のはれ中年なるを笑わん。

「人の世にあつては地上にいる仙人の長寿こそが羨ましい。この目に映る世俗の塵からまだ縁を切れないでいる。大隈侯のように百二十五歳を決まった寿命として、自分の六十などまだ中年だと笑うことにしよう」という内容である。大隈重信は「人は適切な損生をすれば本来百二十五歳まで生きられる」と常々唱えており、その口述をまとめた『人壽百歳以上』なる書物（一九一五（大正四）年、真人社）まで出版されたほどであった。伝統的な典故として蘇東坡の詩を用いる一方、近人大隈重信の言葉をも「典故」として用いた、ユーモ

ア溢れる作品となっている。

このように二水の詩は典故を多用する傾向があるが、一格に拘泥しない詩風である。「三谷翁碑」も「銘」の部分に無理な造語をするなどいささか技巧的な面もなくはないが、全体としては要を得た平明な文であり、三谷の門弟たちの期待に十分応え得たといえよう。

おわりに

公園の片隅にひっそり佇む一枚の石碑も、読み解いてみるとさまざまな事実が浮かび上がってくる。ところが氷見の医療に多大な貢献をした蘭方医の事跡を、富山を代表する漢詩人が顕彰して後世に伝えようとしたこの碑文も、それが漢文で書いてあるというだけで読まれずに埋もれたままであるのは、返す返す惜しいことと言う他ない。せめてこの拙文が、西井三谷の門弟たちや大橋二水の思いをつなぐ一助とならんことを願うものである。

注

- 1 「石川県射水郡氷見町に二社を設け保生社と名け、毎月二回会同して衛生の事を協議し、医学は日課もつけを設て日々数課を修習す。社長は西井快安、副社長は服部政則、社員は（以下略）」（原文の旧漢字・変体仮名を改め、句読を補った。なお一八八一年当時、富山県は石川県に編入されていた。）
- 2 原書は「小西玄瑞」とするが誤記とみられる。
- 3 たとえば宮田栄「黒川良安」（石川県郷土史学会編『先人群像第四上』所収、一九五五年）、「黒川良安良識に生きた蘭学者」（北国新聞社編集局「風雪の碑」取材班編『風雪の碑現代史を刻んだ石川県人たち』所収、一九六八年、北国新聞社）、「黒川良安」（『越中人譚』第四号所収、一九九八年、アキ編集室編、チューリップテレビ出版）など。
- 4 たとえばテレビ金沢で二〇一三年九月一日放送の『いしかわ大百科』シリーズ・近代の石川を支えた偉人たち⑦『近代医療の父・黒川良安』（公式ウェブサイト <https://www.tvkanazawa.co.jp/program/daihyakka2013/2013-0819.html>）など。
- 5 津島北溪は江戸末期の医師で漢詩人（一八二二（文化九）年～一八六二（文久二）年）、越中高岡の人。江戸に遊学して医学と漢学を学び、帰郷して医師を家業とした。詩文を善くし、『高岡詩話』等の著作がある。
- 6 「行英遠浦之日作歌一首（英遠あゝの浦に行く日に作る歌一首）
安乎能宇良尔餘須流之良奈美伊夜末之尔多知之伎与世久安由乎伊多美可聞（英遠の浦に 寄する白波 いや増しに 立ちしき寄せ来く 東風あゆをい

- 7 たみかも)」「〔万葉集〕卷十八・四〇九三 大伴家持)
- 8 津島北溪の自注によれば通称建斎。水見在住の漢詩人とみられるが生平は不詳。本文及び津島北溪の自注によれば名は貞、字は無疆、通称は三平、尾張名古屋の人。月琴と書を善くし、高岡に来て今回の阿尾遊覧に同行していた田代琴岳と交遊していたという。
- 9 原書は「旭村」に作るが、「村」は「莊」の誤りとみられる。
- 10 「咲」は「笑」に同じ。
- 11 「新翻曲」は新たに演奏する曲。「翻曲」はもとの曲を変えずにそのまま演奏する意。唐の白居易「殘酌晚餐」に「舞看新翻曲、歌聽自作詞(舞は新翻の曲を看、歌は自作の詞を聴く)」と云う。
- 12 原書は「毆玄」に作るが、「玄」は「去」の誤りとみられる。「毆」は「驅」に同じ。
- 13 江戸末期の儒者(一八一九(文政二)〜一八八七(明治二十)年)、肥前多久(現佐賀県多久市)の人。江戸の昌平黉で学んだ後、帰郷後は多久をはじめ肥前各地の藩校や私塾で教鞭を執り、一八七六(明治九)年に京都の東西本願寺学寮に出講したのを機に私塾「敬塾」を開き、多くの弟子を育てた。
- 14 名は松世(一八六四(元治元)年〜一九四五(昭和二十)年)。慶応義塾で学んだ後、帰郷して家業の農業を営む傍ら、婦負郡会議員・富山県農工銀行頭取などを歴任、一八九八(明治三十一)年に衆議院議員に当選、二期務めた。その邸宅は「豪農の家 内山邸」として公開されている。
- 15 名は佐次郎(一八六一(文久元)年〜一九三九(昭和十四)年)、婦負郡鶴坂村(現富山市婦中町)の人。岡崎家は代々豪農をもって聞こえた。京都で草場船山に学び、その後木蘇岐山(二八五七(安政四)年〜一九一六(大正五)年)に漢詩を学んだ。婦負郡会議員や婦負郡教育長を務め、一九〇八(明治四十一年)年に衆議院議員に当選、一期務めた後国政から退き、その後は詩文書画に専念した。著作は漢文による中国紀行『燕鴻越鳥縱游日誌』と漢詩集『燕鴻越鳥詩艸』がある。
- 16 名は安太郎(一八七二(明治五)年〜一九六七(昭和四十二)年)、みそ醸造業の三代目として生まれる。叔父の藻谷海東に漢詩文を学び、さらに木蘇岐山に師事。家業の傍ら小杉町長や富山県会議員を務め、小杉図書館の設立にも尽力。生涯に二万首あまりの詩を作ったという。
- 17 「地行仙」は地上にいる仙人。人の長寿を祝う語として用いられる。北宋の蘇軾「樂泉先生生日以鐵拄杖爲壽詩」(樂泉先生の生日に鉄拄杖を以て寿を為す詩)に「先生真是地行仙、住世因循五百年(先生は真に是れ地行の仙、世に住むこと因循五百年)」と云う。

